

「木瓜ほけと野菊のぎく」

宮内 優

四国遍路を成満して仕事を辞めて、華道を習いました。

昔から夢だった山里に住み、野の花を摘んでいけ、お茶を点でて晴耕雨読の生活をしようと、茶道と華道を始めました。

華道は高野山で古くから伝承されてきた「華道高野山」で先生は高野山の華務長である偉いお坊さんでした。

高野山には「生かせいのち」と云う標語があります。いのちとは生命としての命だけでなく、その人であったり動物であったり生き物の個々に具わる特徴であったり個性をも表しています。それは個々に具わるかけがえのないものです。華務長は言葉ではあまり説明はしませんがその個性をいかに引き出しその個性を表現しようとしていることがわかります。

四年前から東京の目黒雅叙園の百段階での多くの華道流派によるいけばな展に出展することになりました。

姉が古流の師範だったこともあり、いけばな展を見に行ったことがありましたが、華道に携わっていない者にとっては花や枝が色々と工夫していけてあるくらいでさっぱりわからず、退屈なものでした。

華道高野山は古くから、高野山の行事の時に決められた活け方などがあり、仏教の宇宙観世界観考え方などを基本的に表現する活け方があります。それは日本の伝統的な文化にも通じるところがあります。

雅叙園のいけばな展では希望される方にはできるだけその説明をさせていただき、喜んで頂きました。

三年目のいけばな展の時に、会場となったお部屋の床の間に、華務長が木瓜と野菊をいけました。水盤に木瓜を立ち姿にいけ、野菊を横姿にいけました。野菊は普通花屋さんには売っていないので、苦労して手に入れたようです。野菊を使いたいいけ花は見たことがありませんし、以前は郊外の道端や畑の隅などで見かけたことがあります。今は滅多に見ません。野菊は、有名な矢切の渡し周辺を舞台にした小説『野菊の墓』で主人公が心を寄せる民子に「民さんは野菊のような人だ」と言ったように、清楚で可憐な花です。

私が木瓜と野菊をいけた床の間の前にいた時に、ご年輩の女性が私に声を掛けました。「この菊はどうやって矯めたのですか？」一瞬理解できませんでしたが、すぐに理解できました。野菊を見たことがある方はご存じですが、野菊は茎が曲がりくねった花です。花屋さんで

売っている菊は茎が真っ直ぐな菊です。それで真っ直ぐな茎を矯めたと思っただけでしょう。しかし菊の茎は折れやすいので尋ねたのだと思います。生け花に使う場合曲がりくねった茎を短所とされ使わずらい野菊は敬遠されていたようです。しかし、真っ直ぐな菊を矯めたと勘違いするほどに、その短所とされていた野菊の茎を長所として使っていました。そして年輩の女性が尋ねるほどに素晴らしい姿でした。

長所は短所、短所は長所と云ふ言葉を耳にした方は多いと思います。当に野菊の短所と云われた部分を長所としていけたのです。

足が速い遅いとか、背が低い高いとか、それを長所短所として言われることがあります。しかしそれは佛の目から見たら長所短所ではなく個性であって、まして優劣でもありません。

このような啓蒙書標語は見たことがありますが、その言葉だけに納得していた部分があります。しかしこの時華務長のいけた花を実際に見てそれを表現した実際の花を見て、短所も長所も人が人の目で判断力で勝手に決めたこと、決めつけたものであることに気が付きました。「生かせいのち」改めてこころに響きました。